

【学園研 B】

1. 研究課題名

ポップカルチャーをめぐる統一理論の研究と授業用教材の作成

2. 研究代表者名

所属学部：国際コミュニケーション学部 職名 教授 氏名 長澤唯史

3. 研究分担者

所属： 職名 氏名

所属： 職名 氏名

所属： 職名 氏名

4. 研究成果の概要（1，200字程度で記入。ただし、図・グラフは使わないこと）

以下、申請書に記載した研究目的・計画・方法に従って、本年度の研究成果をまとめる。

A. 多岐にわたる現代のポップカルチャー研究におけるこれまでの理論的研究、とくに音楽研究（フリス、ニーガスなど）やテレビ研究（フィスクなど）などの個別のジャンル研究の手法やその妥当性を検証することから開始した。具体的には現代のポップミュージック研究やメディア研究の主な方法論となっている社会学的アプローチについての批判的検討を行った。

社会学的アプローチにおいては、それぞれのジャンル全体を支える社会的・経済的・政治的構造と、その構造によって生み出される社会構成員の集団的指向性を問題とする。それによって個別の文化を生み出す背景やプロセスが明確に対象化される、という利点はある。

だが弱点としては、各ジャンルの総体を主対象とするため、個々の作品やジャンルそのものの分析評価にはふさわしくないこと、また社会構造から作品・ジャンルへの一方向的な影響関係にのみ重点を置いたため、個別の作品や作家の登場による社会への衝撃やブレイクスルーといった現象への視点を欠いていることなどがあがる。この点についてはやはり美学的視点・手法が不可欠かつ有益であることを確認した。

B. さらにポップカルチャーを統一した視点から評価・分析する手法や方法論を構築し、複数のジャンルにまたがる新たなポップカルチャー理論の可能性を探った。具体的には Avant-Pop という、Larry McCaffery の提唱する同時代的現象の応用の可能性を、音楽・映画・TV を例に探ることである。Avant-Pop 理論は従前のモダニズム／ポストモダニズムという歴史的かつ方法論的区分が有効ではないという反省から生み出されたものである。とくにポップミュージックにおいては、モダニズムとポストモダニズムの境界線を画定することは容易ではない。

こうした反省から、20世紀初頭から現在に至るおよそ百年間にわたるポップミュージックの歴史を連続的なものにとらえ、アヴァンギャルドという芸術運動と大衆消費社会の相互影響による新たな文化が1950年代以降に登場したこと、この歴史を先のモダニズム／ポストモダニズムというモデルに当て嵌めることは無理があること、その現象の分析にはアヴァン・ポップというモデルが有効であることを確認した。

C. 現在担当している「ポップカルチャーの理論」（国際コミュニケーション学部学科専門科目）で使用する講義用のパワーポイント教材を作成し、学生向けの講義においてどの程度まで上記の分析結果を応用可能であるかを検証した。

授業用の教材としてパワーポイントを使用することで、黒板の板書にかかる時間を短縮でき、その分授業内容を充実させることが可能となった。また作成する教材の内容・提示方法を工夫することにより、講義全体の流れを理解しやすくすることができ、結果的に高度に理論的な内容を教授することも無理ではなくなった。中間・定期試験においても、昨年度と比較して明らかに学生の理解度は向上していることは確認できた。

今後はより内容を整理・精査して、学生の理解度をさらに高め、専門性の高い授業を目指したい。